

西堂智藏塔の塔側の刻文について

鈴木哲雄

一 旅行目的と宝華寺の情況

一九八七年（昭和六二年）七月五日より九月二二日の間、愛知学院大学の短期在外研究の費用を受けて、単独で浙江省・江西省を中心に、一部湖北省・廣東省・北京市の禪宗史蹟の調査をした。簡単な学内報告は帰国後すぐにスライドを用いてなしたが、諸事多端なため、まだ全体の研究報告はしていない。近いうちに記録写真を中心にして解説をほどこした調査報告書を出版したいと思っている。

江西省南部の調査では中心都市である贛州市の贛南賓館に宿をとり、ここを起点として各地を訪ねた。江西省の中央部を南北に縦断し、北流して鄱陽湖に流入する贛江は、上流（南方）の贛州市で貢水と章水の二つの大きな支流となっている。貢水は西流し、章水は東北流して、贛州市で合流して贛江となる。贛という字も章水と貢水の二字が合してできている。章水は贛州市の南辺を西に廻つてまた東

面の両側に書かれた刻文を発見し、きわめて重要なものであるという結論に達したからであり、更に塔の美しさも屈指であることから、遅ればせながら、この機会に研究報告をするものである。田島博士傘寿記念論文集のために、拙いながら報恩の意をこめた。

この調査旅行の中で圧巻だったのは西堂智藏塔であった。多分調査目的で入ったのは筆者が初めてであつたという自信もあるが、後述のように、調査の中で、智藏塔の塔の側

西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）

に廻り、市の外辺を半分めぐるようにして市の中南部の北端から北流する。貢水は市の北端で合流し、北流して贛江となるのである。また贛県は市の東にあり、貢水の北側に位置する。

八月五日は薄曇で一時雷雨があつた。八時に賓館を出発し、対岸にある贛県人民政府に行き、贛県人民政府事務室副主任（当時）の劉聖煌氏の案内を得て龔公山に向け出発した。九時四五分贛県田村人民政府に着き、ここで休息した。この近くには晋代開創の契真寺があり、大雄宝殿が今も残っているというが、時間の都合で割愛した。ここには文革前に二人の僧が居り、法雲という方はアメリカに渡り寺を開き、他の一人法慧という方は于都県雪峯寺の住持となつていて、省の仏教会の理事を勤めているという。一〇時に出発し、赤土、岩土の中を経、さとうきび畑を経て、一〇時四〇分、地元の人の言葉では東山というところの宝華寺に着いた。田村郷より東北の方角の感じがする。州からは東北東方向七二キロ、県からは六三キロ、田村郷からは一五キロである。田村は分省地図にも載つてゐる。住職の会長老師に挨拶した。老師は御自分の戒牒を見せてくれ

た。現在の戒牒がどういうものか参考に資するため、写真にとらせてもらつた。寺は南面する。寺としては、横に長い棟が三棟ある。最前の棟は三つに仕切られ、中央が弥勒殿である。その後の棟も三つに仕切られ、中央が大雄宝殿である。この両棟には弥勒・韋馱天・十八羅漢・三仏の塑像は具えているが、泥像である。弥勒殿の棟の東南前に一本の大銀杏がある。その東側、つまり弥勒殿の棟の東側に、大雄宝殿の棟に通ずる廊下がある。大雄宝殿の後に臨時の小学校がある。もともと寺の建物の一部であつたろう。その奥（北）も一段と高く段状になつてゐるから、建物があつたと思われる。その後の最後部に嬉嬉殿がある。ここも三部屋に仕切られている。左側（西）はもと馬祖の塔のあったところで、開基の塔であるから、基塔といつた。今はがらんとしていて何もない。その塔は基礎部分が三メートル四方、高さは六メートルであつたという。中央の部屋が大覺殿で、玉石造りの偉大な塔がある。これが西堂智藏の塔である。大きさは馬祖の塔より少しこぶりであるが、美しさは抜群である。塔の下に井戸があり、出木池といわれる。智藏塔のあるところの外側（南）の柱（東側）の脇

に、唐枝撰の「重建大宝光塔碑銘」があるが、「咸通十五年二月八日建 元豐二年七月十五日 住持覺顯重立」という文字が見える。歐陽輔が贛州府志に採録した唐枝撰の碑文等について、誤りを厳しく批判するが、また歐陽輔自身も碑銘中の大中を咸通の誤りであろうと指摘する点について、それは歐陽輔の誤りであると見た筆者の論考は、

『唐五代の禪宗——湖南江西篇——』

(大東出版社、昭和五九年)

の一七一页から一七五頁までに載せたから、重ねて述べることを避けるが、実物を見て自説の正しいことを確信するに至った。この棟の東端に二階風の透彫をした建物の一部が残っている。日本風にいえば鐘鼓楼のような感じがする。その後(北)に建物が続いてあつたであろうか。選仏堂のように思われる。寺の前の田のヘリの道の脇に竜泉井がある。五百人の飲料水に足るといわれ、現在も村民が使用している。『贛州府志』でいう「勒潭龍井」というのがこれであろう。後に記した刻文中の天龍を招いて功德智水を獲、民の疾をおしたとされるそれが、この竜泉井と思われる。龔公山がどの山か尋ねたが知らないという。はるか東に山はあるが、宝華寺近辺には山らしきものは見

えない。もと後に山があつたのかもしれないが、今はわからなくなっている。一二時三〇分田村郷に着き、招待されて昼食をとる。二時一五分出発し、三時二〇分贛南賓館に着いた。夕方、贛州市外事辦公室主催の晩餐会に出席した。

二 智藏塔の塔側の刻文

智藏塔に礼拝し、しばらく偉容に圧倒され、美しさに見とれていたが、何か文字らしきものはないか捜しているうち、向つて塔の右側の面に文字らしいものが見付かった。くらくてよくわからない。高いので椅子をかりてそれにのり、ライターでかざしてみた。唐元和十四年という文字が読みとれた。立派な玉石であるが、さすが長年月を経ているためか、筋目も多く、また何やら天女の裳の刻線のようないもの(実は松の幹と葉)があり、よけいに文字がわからなくなっている。文字の彫りも浅い。とても短い間に記録できるものではない。好事の鈴木秋雄という人が、どうしても同行したいということであったので、強行の旅行に耐えられるか心配であつたが、耐えて従つてきてくれた。そこで彼に専ら写真係をまかせていた。筆者は少し斜めから

西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）

撮れば、何とか刻線が浮かび出るかもしないと、かすかな願いをこめて彼に撮影を依頼した。帰国してから引き伸ばしてみると、文字は相当数判読できることがわかった。写真専門家は光量が不足するとということであつたが、多分光量があつても無理であろう。将来において赤外線写真でも撮ることがあれば、文字は大部分わかるであろう。更に反対側にも文字が彫られていることがわかつた。ついでにこれも写真に収めた。こちらの方は一段と読みずらい。文字を拾つてみよう。

維唐元和十四年歲次己亥
月直乙亥日惟壬辰建此
靈□至十五年十一月廿七
日畢功 大匠喻明村
壬近熊忿周質等八人同心
□方喜見成就故雋記云
□□當□塔僧契真等
□勾當院主僧如位等
(□は不明、?は推定の文字)

当地で元和十四年という文字が読めた時、全く胸が踊るような心地であつたが、刻文の重要さについては全体がわからぬので半信半疑であった。しかし今これだけはつきりすると、きわめて重要な刻文であり、それは今まで誰にも知られずいたものであることが明らかになつた。更にこの刻文は智藏塔そのものの成立時にも及んでいくものであるという貴重なものであることが解ってきた。

文字のはつきりしないところが少しあるが、わかる範囲で意味をとるならば、

唐の元和一四年（己亥歳）乙亥月壬辰日にこの靈塔の建立を発願し、翌一五年一一月二七日に建立された。工匠は壬近、熊忿、周質ら八人で、人々は喜んでこの成就を見た。それで鏽つて記すものである。塔僧契真ら、院主如位らが功を記した。

というところであろう。西暦八一九年乙亥月（？）に着工し、翌年の一一月に完成した。勾当の上の□は当用漢字の「國」のように思える。如位についてはわからないが、院主であり、虔州の僧官ではなかつたかと思われる。契真是百丈懷海の弟子により、後に浙江越州の大中禹迹等に住し

た。西堂の塔を守つたこの契真は恐らく禹迹契真のことであると思われる。『宋高宗伝』卷一〇馬祖道一伝の付見で西堂の条を設けているが、それによれば太守李渤が旌表を請い、長慶元年（八二二）に至つて、大覺禪師の謚号を賜つたと述べている。李渤はこの年に虔州刺史となつていたから、西堂の弟子たちはこのすばらしい塔が出来上つたところで、たまたま赴任してきた有名な李渤に謚号を賜るよう都に言上してもらい、また碑銘を依頼したのであつた。

もう一つ注意しておきたいのは、刻文の終りから三行めの頭の文字（「方」の上の文字）は、どうも「劔」もしくは「効」のごとくである。しかしこの文字が「劔」もしくは劔にならつた異体文字ならば、唐枝の碑銘中に記している西堂の塔の制作を主つた江西觀察使薛倣のことになるのではない。すなわちこの刻文の作者はまさしく薛倣が書いたといふことになろう。ただし普通は觀察使である身分を記すから、たとい西堂を崇敬し、塔側に記したものという条件はあるとしても、名の一字のみということには疑問が残る。因みに薛倣とは『旧唐書』卷一五五の薛戎伝に付した弟の薛放のことである。穆宗が皇太子の時から信任を得、工部

郎集賢学士、刑部侍郎を経、兵部侍郎、礼部尚書判院事に転じ、宝曆元年（八二五）に江西觀察使で卒した。

次に塔に向つて左側の塔側の刻文についてみてみよう。前の右側の書体とは似てゐるようでもあるが、右側のようにがつちりした文字ではなく、やや線が細く、おだやかで、彫りが浅い。それで一層判読しがたい。かろうじてわかる文字を次に記す。

大中 皇帝撫以金鏡遐照乾坤育以黔黎無幽不覩以喜
鑄自執施工研伐暨乎歲于奉勅弘潔門令削毬
釋開井並龔公陽迴壯從縉雖未毗尼迹
爲僧中之大中七年歲在作噩月唯造乎龔公之山刀
西林至
歲在獻之月五日雨坐山
林
□□□□□感神理託投夢中彼功德智水可以愈民之疾
感十方縉俗廣招天龍以求其水獲由之後如闇得燈如
貧獲寶奉天書令起造西堂塔乃命匠者
胡公以大中十年歲在景子月唯單施邑雕鐫

八月廿七日儼然成就其事□□用地□以百千又鑄四

□□用青鳩十千又立塔堂百千又立塔碑百千郡首

唐郎中制文始立龔公即屬此大□□□以大曆元

年歲于景午乃剏其矣

都料胡岳 副進達元 □□ 遇□□□人齊心成就

この文面では確かにことは述べられないが、文意は次の
ごとくであろうか。

大中皇帝宣宗は仏教復興の勅を出した。大中七年（八五三）龔公山の復興をはじめ、大中十年（八五六）八月二十七日完成し、更に塔堂を建て、塔碑も立てたが、全く百千郡の首たるものである。唐郎中が文を制してはじめて龔公山に立てたということをいわんとしているようである。

次に覺顯重立の唐枝撰の『大宝光塔碑銘』を参考にする
と、宣宗の詔で大中七年十月九日、破壊された大宝光塔が
重建されたという。この刻文では大中七年から龔公山の復
興の工事がはじまつたようであるから、唐枝の十月九日と
は詔の下つた日と読み取るべきであろう。そして塔の再建
を含めての山内全体の復興の完成は、刻文の通り大中十年
八月二十七日と読み取るべきであろう。

この左側の刻文によつて、現存する塔がまさしく唐枝の
いう重建の宝光塔であると判明する。

では右側の刻文との関係はどうか。右側の刻文は元和十
五年（八二〇）に智藏の塔が完成した時のものであり、実

しないが「剏」のようである。そうであるならば「剏（サ
ウ）」であろう。創に通じ、「はじめる」の意である。馬祖
は路嗣恭の招請で龔公山より洪州開元寺に移り、あとを西
堂にまかせた。路嗣恭は大曆六年（七七一）江西觀察使と
なつたのであるから、馬祖が開元寺に出るのはそれ以前の
ことではあり得ない。刻文中の大曆元年が何を意味するか
はつきりしないが、どうも唐郎中が文を制してはじめて龔
公山に立てたということをいわんとしているようである。

はその翌年（八二二）に旌表を請い、それで大覺禪師と賜つたのであるから、その時点での塔が宝光塔と呼ばれるようになつたのである。右側の刻文は左側の刻文と同時に、先に作られた宝光塔の刻文を右側に模して刻したのであるうか。筆者はそうと思わない。右と左は字体が少しばかり違うようだし、左側は彫りが浅い。つまり破壊された塔を組み直し、補修して再建したとみないのである。そうであるならば、左側の刻文は大中十年八月二十七日に完成した時のもので、この部分の石自体は最初のものであつたと、少なくとも言えると思う。それらのことを証言する刻文として重要であり、改めてこの宝光塔が貴重なものであると言えるのである。

三 江西地方近辺の唐代の禪僧の塔

筆者は塔の造形については何らの知識を持たない。そこで旅行に取材した写真を付して、宝光塔の成立時を識者の考究に供したい。

西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）



2. 湖北黄梅県馮茂山五祖弘忍塔



1. 湖北黄梅県双峯山四祖道信塔

西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）

4. 浙江寧波の七塔寺
棲心藏奐塔



5. 江西贛県龔公山宝華寺傭嬌殿。
もと馬祖の塔のあった部屋の
天井



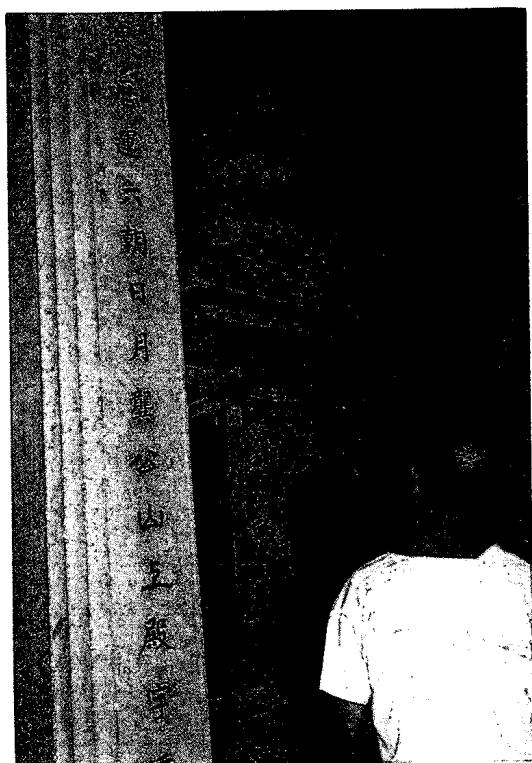
3. 江西建昌県石門山馬祖道一の塔跡
塔を覆っていた石柱の建物



7. 宝光塔台座の彫刻



8. 浙江杭州塩官鎮安國寺經幢(唐代)
塩官齊安の住した寺跡



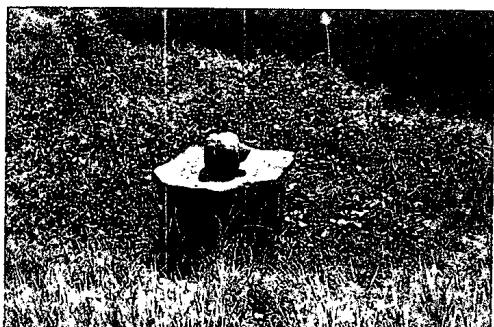
6. 江西贛県宝華寺宝光塔



11. 江西宜春楊岐山、楊岐乗広の塔
といわれている



9. 安国寺経幢の彫刻。唐代の長安
の風が入っている



10. 江西宜春県楊岐山、楊岐甄叔の
塔といわれる



13. 江西宜春県仰山の北の山中の塔
(農家の裏にある)



12. 江西新昌県黄檗山の黄檗希運断
際禪師塔 (前の塔)

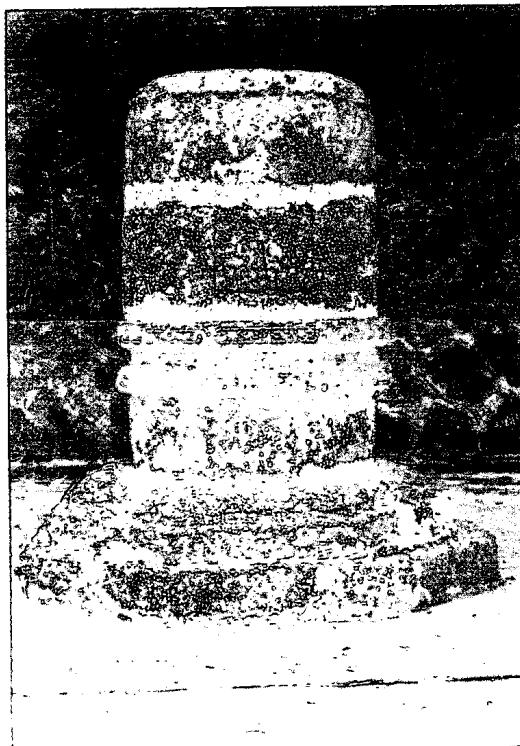
西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）



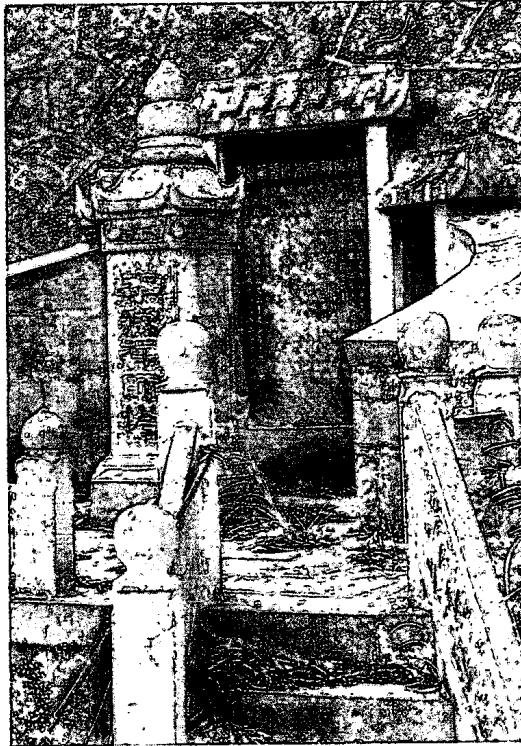
15. 江西新昌県洞山の洞山良价の塔



14. 仰山の西の山中にある塔群の中
の一基



17. 江西建昌県雲居山の雲居道膺の塔



16. 江西宜黄県曹山の曹山本寂の塔

これらの他に唐代のこの地方に近いものとして参考になるものは、駒沢大学仏教史蹟參觀団『中国仏蹟見聞記』第五集の、湖南瀏陽県石霜山の石霜慶諸の塔と、常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』写真第七九図の見相塔（石頭希遷）及び八〇図の最勝輪塔（南嶽懷讓）である。

これらの塔を並べてみて気づくことを記す。まず第一に塔の中央部分が空洞になつているものがある。弘忍塔・智藏塔・仰山の北側の塔・楊岐甄叔の塔もそうではなかろうか。筆者は調査中に吉安博物館で、写真のための銅版で、七祖塔（青原行思塔）を撮つたものが残つている。スケッチした。塔は文革で破壊され、現在は青原寺の裏の岡に、石の柱のみ残されている。博物館の七祖塔の外景写真は建築物であるから、祖廟というべきものであろう。とするが、祖廟の中の石柱が塔を覆つていたもので、その中に塔があつたということにならうか。石柱は六本あつたと記憶しているから、馬祖の塔は東屋風の石造りの建物（写真3）と同じであつたろうか。さて青原の塔は、上部が六角でひさしになるような大きさで五層をなし、その下にひさしとして出ている部分の除いた程の長四角の石で、中央下部が

西堂智藏塔の塔側の刻文について（鈴木）

空洞になつているようであり、上部は彫刻されているように感じる。その下はほぼ正方形に近く、ひさしの出ている部分まである大きさで、中央から下に、ちょうど門のように卵形にくりぬかれた空洞になつてている。その両脇にそでが付いている。そうするとこの一番下の部分は、智藏塔の中央部分が一番下になつたような様子である。この空洞は靈骨を納める部分であつたろうか。石門山の馬祖塔は文革で破壊され、様子はわからないが、石函は塔のあつた下の地中から出た（現在南昌の博物館蔵という）というから、靈骨がそこに納められたとは思われない。智藏塔よりみて、この空洞のある形は八世紀末より九世紀前半のものであるのではなかろうか。第二に支那佛教史蹟踏査記所収の石頭塔と南嶽塔は同形で、この胴部を圧縮した形が雲居道膺塔（写真17）である。この胴部のなくなつたものが宋代の塔（例ええば大慧永果の塔）で、棲心藏夾の塔（八七四年の寿相塔、写真4）もこの流れの中にある。第三に道信塔（写真1）・楊岐乘広塔（写真11）・黃檗塔（写真12）で、胴の部分が長くなつてスリム化して、洞山塔（写真15）や曹山塔（写真16）となる。乗広塔が胴部に彫刻をほどこして一層

装飾化されている。

では西堂塔はどうであろうか。中央部が空洞となつてゐる形として弘忍・青原の塔の流れにはあるが、上部は道信塔と形式的に同じで、ひさしの部分が建物の屋根のひさしのようになつて、一層精緻となる。そして塔全体に彫刻がほどこされ華麗である。ただ屋根の下のたる木に当る部分が、どうも一連の石と材質が違うような感じがする。破仏で壊されたものをもう一度組み直した時補つたのではなかろうか。西堂塔は禅僧の塔の形式上にはあるが、もう一つ違うものを感じる。そこで思ったのは、塩官齊安の住した安国寺跡に残つている経幢である。現地の説明ではこの経幢は唐代のもので、長安の風が入つているということである。参考のために挙げた写真8がそれで、全体に彫刻がほどこされている。中央長い柱の部分に経文が彫られているわけである。それでかなりのたて長であるが、これを上下に圧縮すると、第三で述べた禅僧の塔に近くなる。西堂の宝光塔は経幢の形が入つているように思われる。また中央部に刻文があるということも、経幢の経文があるのと同じである。唐の盛時、禅宗の最もきらめいていた時代の、禅

僧の最も豪華な塔が西堂塔といえる。制作者が経幢の理念を塔に組み入れたためにそのようになったと思われる。長安の巨大な祖師方の塔からすれば小さいが、長安が四角を基本にしているのに対し、この地方は六角が基本で柔らかさを出している。塔の構想力は長安に決して劣るものではなかろう。宝光塔も三メートルは超えるが、その隣にあつた馬祖塔は六メートルあつたという。わずかに天井部分（天蓋に当ろう）にその巨大な塔の面影を残す（写真5）。

筆者はこれらを通して八二〇年建立の宝光塔であると確信するのである。また大覚禪師の謚号については宋高僧伝と景德伝燈錄が八二一年とし、唐枝の碑文は八二四年とするが、建立の翌年の八二一とみるのが自然と思われる。そうすると宋伝・伝燈錄の八一四年入寂とする方が、八一七年入寂とする唐枝の説より信頼できることとなる。宋伝でいう入寂して塔に遷し、それから宝光塔を作つたというのが正しかろう。何にしても唐枝がこの宝光塔の塔側の刻文を知らなかつたというのが問題である。（追記。中外日報一月九日号に、円通幸温師が同志と共に、青原塔を復旧したと報じている。すばらしい報恩行である）